
IdeaNote

過労死確定

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IdeaNote

【Nコード】

N1049R

【作者名】

過労死確定

【あらすじ】

小説のIdeaを纏めているとき、作者は気付いてしまった……。

これ、全部書くの無理じゃね？

このままでは自分が過労死してしまう！

でも、このままこのIdeaを腐らせておくのは勿体ない！

そこで作者は閃いた！

そつだ、誰かに書いてもらおう。

というわけで、作者が考えた二次創作の原案が、ここにはのっています。

プロローグのみを書いておくので、この話の続きを書きたいと思った方は、感想にて連絡を入れてください。

先着順で、執筆の権利はすべてその方に譲渡します。

では、お待ちしております！

ハリー・ポッターと陰陽師の教師

とある私立高校にて、薄汚い白衣をきたおっさんが黒板のまえにたち、素晴らしい早さで板書をおこなっていた。

腰まで伸びた長い髪が特徴のだらしない、このおっさんは日本史の教師のようで、黒板には年号とともにいくつかのもじがかかっている。

「これ、テストにでるからな。覚えておけ。」

教師が振り向くと同時にチャイムが鳴り響き、一気に教室のなか騒がしくなった。

昼休みの時間なのだ。

教師はめんどくさそうに起立、礼を終わらせると、どの生徒よりもはやく教室を出ていった。

普段はこのまま職員室に帰り飯をたべて仕事をするのだが……
……あいにく、彼には予定があった。

昼飯を食べに行くために購買に向かって流れる生徒達の波を軽やかに避けながら、彼は屋上に向かった。

立入禁止のふだが貼られているのをあっさり無視して、彼は屋上へとつながる階段を上がり、屋上へと姿を表した。

そこには長い髪と髭の全てが真っ白になった半月型の眼鏡をかけた老人が立っていた。

「よお。ひさしぶりやなアルバス。」

「あいも変わらず変わらぬな……………陰陽師。」

…†…†……………†…†…

事前に購買で確保しておいたパック型の容器にはいったジュース（コーヒー牛乳）をストローで吸い取りながら、教師は地のしゃべり方である関西弁で気さくに老人と会話をしていた。

「ふーん。リリイとジェームズのガキがな……………もうそんな歳かいな。」

「光陰やのごとしじゃな。とくにこの歳になると時がたつのを早く感じる。」

「せやったら俺は、時間がマツハで通り過ぎんな。矢なんて目やないで。あ、そういうたら用事があったんやっただな？なんやっただけ。」

「ホグワーツに東洋魔術の授業をいれたいと思っておる。あなたの力が借りたいのじゃ。」

「なんや、ヘッドハンティングにきたんかいな。」

「来ていただけるかな？」

教師は暫く考えた後、ニヤツと嫌な笑みを浮かべて首を縦に振った。

「普通の学校にはあきとったところやで。上等や。千歳になった記念に、ホグワーツの教員、引き受けたる。」

ホグワーツに伝説の陰陽師が襲来することが、この時確定した。

ダンディズム・マダオ（前書き）

ええ、そうです。銀魂の二次創作です。

ダンディズム・マダオ

今週のジャンプでグラサンが分身していた。

「いや、なんでリングデイントン！お前じゃ勝てないよ、長谷川！」

「おまえ、よくこの状況で漫画読んでられんな！カエラとか今はどうでもいいだろうが！」

怒声と共に塹壕に戻ってきた友人をみて、グラサンをかけたおっさんはハードボイルドな笑みを浮かべた。

「よう、戦況はどうよ。」

「まじでやべえ。あのバカ將軍、明らかに罠ってわかっていたのに功を焦って部隊の半分をつぎこみやがった！今回も負け戦だよ。」

「そうかい。」

グラサンのおっさんはそれだけ言うと、ジャンプを男に渡し刀を掴む。

「んじゃ、撤退だな。俺の出番か？」

「ああ。……………すまない。」

「なあに、いいってことよ。」

「というのがお前の前世なわけじゃが……………」。

「いや……………しってるよ？覚えてるよ！？なんでわざわざ回想させたんだよ！！」

「ここは所謂死後の世界。」

真っ白な空間のなかに、白い髭を生やした老人と、泰三が座っていた。

「か　　ッ！このバカモンが！読者のためにきまっとろ
うが！！空気読めグラサン！」

「オレをバカにするのはいいがグラサンを馬鹿にするなああああ
あああああ！」

神と壮絶な殴りあいが始まりかけたが、それは一人の主婦の登場
によって中止された。

「神ちゃん！あんた学校にも行かずになにしてるの！！」

「か、母ちゃん!？」

「母ちゃん?!あと学校!?!神様もいくの?!!!」

なんか……………母親を名乗る髭を生やしたオバサンが登場したのだ。

「うっせえよクソババア!ていうか部屋に勝手にはいんなったろうが!」

「あ、あんたが今日の神ちゃんの話し相手?御免なさいね。この学校にも行かずにここに引きこもってばかりだから、話相手に餓えているの。よかつたら、暫くここにおいて話相手になってあげてくれない。」

「いいっすよ。俺もちょうど死んだところですし。」

「そう?ありがとだね。ほら、神ちゃんからもお礼言いなさい。」

「もういいよ、でてけよババア!もう入って来んなよお!」

ちよっと半泣きになりながらお母さんを追い出した神は暫く肩で息をして、ちよっとだけ目元を拭いた後、登場したときのような雰囲気を取り繕いながらこちらを振り返った。

「さて、おぬしには憑依転生をしてもらおう。」

「学校には行けよ神ちゃん。」

「ちよ、もう、お前……………ゆうなやあああああああ!」

「！」

涙を流しながらマジレスしてくる神をひとしきり笑った後、泰三は明らかにめんどくさそうな態度で尋ねた。

「なんで俺？」

「お前に憑依してもらおう予定の男がお前に似ておるからじゃ。」

「だれなんだよ。そいつは。」

「銀魂・長谷川泰三。」

「……………！」

「おぬしはコイツに転生してもらおう。」

「まじでか……………。」

実は彼自身も『見た目が似てるなー』と思いながら読んでいたキヤラクターなのだ。

「転生の際にはお前の記憶と魔法の知識を残しておく予定じゃ。」

魔法は治療用の回復魔法だ。彼が不死と呼ばれる理由はここにあり、どんな重傷も一瞬で治し直せない病は存在しないほどである。

「じゃが、おぬしは別人の体になるわけじゃから、自身にかけられていた再生魔法は使えぬぞ。」

「ようするに、俺自身は《不死者》ではなく普通の人間になるわけか……。あれはマッドな科学者にやられたものだし、向こうでの再現は無理だろうな。」

泰三は暫く考えた後、不敵に笑って返事を返した。

「いいぜ。俺があのだオになって、アイツの人生をかえてやる。」

「まあ、ワシは暇潰しのために呼んだんじゃがな。」

神はそれだけいうと、手を一振りした。

直後！

泰三の足場が突然穴に変化し、泰三を凄まじい速度で落下させる。

「幸運を。」

白い空間には神の言葉だけが残った。

ダンディズム・マダオ（後書き）

主人公がマダオの体に憑依し攘夷戦争に参加。

するお話。

その後はお任せします。

オリジナル主人公設定 ネギま

名前・山梨芳清・男
やまなしほうせい

原作名・ネギま/能力のみ伝説の勇者の伝説

設定・神とか魔法とかそんなものに一切関係ない普通の一般人。だつた少年。

小学4年生のころに神の声も聞いていないのに《イノ・ドワーエ殲滅眼》に開眼（ちなみに伝説の勇者の伝説の原作はあるという設定）

人を食べてしまうかもという恐怖負け引きこもりになる。

それから三年間家に引きこもっていたのだが、伝勇伝原作者・鏡貴也に応援のメッセージをもらい復帰。それ以来鏡貴也を神のように信奉している。魔法がこの世界に存在しているということが知らないこともこの復帰の一因となっている。

引きこもりから復帰した彼だったが、一年遅れで編入した学校は麻帆良学園男子中等部。当然のごとく人払いの結界などが彼に効くわけもなく、真夜中コンビニに行った帰りに鬼を目撃。

その鬼からは何とか逃げ切ることに成功したが、魔法先生たちにつかまってしまう。

当然彼はきちんとした訓練を受けることを強要されるが、逃走。できるだけ一般人の友人の近くにいることで魔法先生たちの追撃を回避する。

彼自身の性格としては、人食の衝動がわき上がる可能性があることは極力控えているため、血を見るのが大の苦手。戦闘すること事態嫌いであり、戦うぐらいなら即座に逃げを選択する。

性格はかなり温和で口調も優しい。殲滅眼さえなければ間違いなく清く正しい一般人に分類される人間である。

殲滅眼性能・原作とほとんど変わらず、空気中からは微弱な魔力を吸収すること、魔法を根こそぎ食らうこと、それによって回復力、身体能力が異常に活性化することが主な能力。

原作と違うのは………というか付属効果として、気による攻撃も完全に吸収し力にすることができぐらい。

人食衝動の有無は今のところ確認されてはいないが、鏡貴也の考察では《原作でも人食衝動は完全にないたため、おそらくはないだろう》と推察されている。ただ、人を食べられるかどうかは不明のまま。

オリジナル主人公設定 未定

名前・未定・男

原作名・未定

設定・幸薄き少年。具体的に言うと、外を歩けば必ず犬の糞を踏み、お金を落とすことなんて日常茶飯事。詐欺にあうこと多数。強盗事件に巻き込まれること12回。

町の不良には必ず一日一回は絡まれ、酔っ払い親父の介抱をすれば必ずげるを浴びてしまうという、もう不幸が服を着て歩いているんじゃないかと言わんばかりの不幸っぷりを発揮する。

当然学校でも友達はおらず、幼いころに両親も亡くしていたためひどく孤独な生涯を送っているときに横断歩道を渡っている老人を助けようとしてトラックにはねられ死亡する。

その後、死後の世界に手神に土下座されて謝られる。どうやら彼の不幸っぷりの原因は神が仕事をミスったかららしい。

いろいろあきらめていた彼は、謝り倒す神を笑って許したが、それでは気が治まらないということで転生の権利を得た。

しかし、彼としては別にチート性能とかはいらなかった。ただ彼は一つだけ神に願った。

「来世では親友と呼べる人ができればいいな……………」と、

神はチート性にならない限りで、友達を作る手段を要求されある一つの能力を彼に与えるのだった。

性格は温和の一言。不幸に見舞われながら恨み言一つ言わずにニコニコ笑うほどの猛者。基本的に自分に降りかかる不幸にはひどく鈍感で気にしないが、他者が不幸になるのをとても嫌がり、全力で助けようとする傾向がある。

口調は執事のように丁寧。卑猥な言葉を聞くと顔を真っ赤にして『そ、そういうことをいってはいけません!!』とおこっってくるので、かなり生真面目な性格だと思われる。

天性のツツコミの才能あり。

殺人は基本的に許容しないが、今後どうなるかは未定。

能力・《異世界住人召喚・五人限定》

神が主人公に与えた能力。主人公が知っている小説・漫画の登場人物を五人だけ召喚することができる。召喚前は白紙のカードとなっており、召喚と同時にカードは姿をけす。

召喚した人物は神に作られた存在らしく性格とかはそのままで、過去や設定を一切忘れていて、というか、存在しない。ただし無条件で信頼し友人になってくれるなどという都合のいいことは一切なく、主人公を見限られれば勝手に離れていくほどの自由意志を持っている。

召喚決定人物・《上条当麻》

言わずと知れた《とある魔術の禁書目録》の主人公。主人公は自分と同じ境遇にいるのに決して屈折せず、かつこよく生きる（主人公観）上条にあこがれているため彼を召喚する。召喚と同時に主人公が望むアイテムが一つ贈与されるのだが、上条の場合は幻想殺^{イマジンブレ}しがもたらす不幸を軽減する手袋が贈られた。

《忍野忍ノキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード》

なんらかの理由で戦闘に巻き込まれてしまった主人公と当麻のピッチを救ってもらったために主人公が呼び出した《化物語》の最強の吸血鬼。

神による改造を受けたらしく、人食はできない体になっている。代わりに普通の食事で栄養が取れるようになっていたようだが、やはり好物は血液のため、主人公によく血をもらっている。彼女に与えられたアイテムは阿良々木暦が吸血鬼の能力を封じたときと同じ状態にするブレスレッド。その状態のときは主人公に肩車をしてもらっており上条はよく喧嘩をしている。

性格的には、封印後阿良々木と和解をした後のような感じ。『ばないの！』が口癖。

残り三人は未定。

二人の金色の吸血鬼 ネギま×化物語

化物語×ネギま

あらすじ

本来なら死ぬはずではなかったキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。しかし、彼女はとある転生者の出現によって運命が変わってしまい、心渡の所有者が自殺する現場を見てしまい絶望し自殺してしまう。

そんな彼女ではあったが、それを見て怒り狂った神が彼女を神の部屋へと召喚。

「死んだだけでお前の罪が消えると思ってるの？マジウケるわー。絶望したからって好きなタイミングで死ぬると思うなよ。お前には贖罪として異世界に行ってもらおう。その異世界でお前が元いた世界で殺した人間の数×百人の人間を救うまで死ぬないように呪いをかけた。それが終わったらあとは死ぬなりなんなりスキにしる。ちなみにその過程で人を殺したらその数×百人追加だからそここのところよろしく〜」

そうして、『自殺とか殺されたりしたらたまらん』という理由から彼女がもっていた吸血鬼としての弱点をすべて消された上に、妖刀と化した心渡を渡され、『前の名前が偉そうでムカつく』というりゆうで『忍野忍』と名前を改名され、そんなかみからの『補正』をうけた彼女は異世界に送られた。

死にたいシニタイと心の奥底で考えながら、人を救っていくキス

シヨット。そんな彼女はとある古城で吸血鬼に変えられてしまった一人の少女を救うことになった。

彼女の名前はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。

彼女たちの出会いによって物語は加速する！！

作者による説明

忍による、キティのための、二次創作です。

更新が停止されているので提案してみました。いや、ねえ・・・悪いとは思いますが設定は多少代えさせてもらうので勘弁してください。正直続きが見たいのに更新されないという生殺し状態です。

ガールズラブではありませんので嚴重注意を！！（まあ、実際書いていただけるならお任せしますが）

忍の性格的には阿良々木と和解して吸血鬼としてのキャラがガラガラと崩れているあたり。「ぱないの！！」「フツーに言う感じです。

ちまちま人を救っていても埒が明かないということで戦争にも介入します。

基本的設定はこんな感じです。書いていただけならあとはお任せしますが、できれば魔法世界編まで書いてほしいなあというのが

作者の本音だったりします。

ではでは、小説仕上げなければならぬのでこの辺で!!

オリキャラ設定 BLEACH

名前・ロバル・アルカリエ

転生世界・ブリーチ（BLEACH）

設定・いつの間にか虚圏の最上級大虚ヴァストローデに憑依転生してしまった、礼儀正しい元高校生。当然BLEACHの原作知識は持っており、最終的に藍染にごみのように捨てられる虚の将来を嫌がり、藍染に対抗するために虚圏で破面とは違う進化を目的とした大組織を設立していく。

能力・未定。しかし、元高校生であるためまともな戦闘はできない。その都合に合わせて藍染と同じく強力な精神操作系が望ましい。

破面とは別ルートの進化・崩玉の影響を受けないうちにロバルが考え出した破面以外の進化法。

解面カイ・最終的に強くなるには仮面をどのような形であつても外さなければならぬ。という考えのもとに考案された進化法。仮面は自分の失った心の一部と仮定し、それとの対話を行い屈服させることで仮面の取り外しが可能となった進化方法。大体《帰刃》前の破面と同じ強さ。斬魄刀を保有するがこれはただのオプションとして霊圧を固めたものなので大した力はない。そのため作らないものもいる。すがたはだいたい人間になるが本来ならあり得ないような髪の色になるためまだまだ人間には程遠いらしい。

仮面剣・死神の《卍解》。破面の《帰刃》と同じ強さを手に入るためのもの。仮面と自身の霊圧を融合させることによって不気

味な白い特殊能力を持った武器を作ることができる。霊力も格段に上がり虚閃も王虚の閃光級まで威力が上がる。

ヒューマホロウ

人虚・《虚化した死神も、死神に近づいた虚も最終的に近づけばはすべての始まりである人間である》という考えに肉付けをして完成された虚の最終進化系。最後の月牙天衝の使えば死神の力をすべて失い人に戻る、ということもこの理論を強化する要因となった。強さは大体一護の《最後の月牙天衝》と同等ぐらい。

活動時間は長く持って二時間程度。それが終わると虚の時の罪をすべて洗い流され人の子供として新たに生を受けることになると思される。

性格・真正のビビリ。自身で戦うことをひどく嫌いたいていは精神操作の力を使い煙に巻く方法をとる。その徹底ぶりは「自分がもっている死の形は《臆病》ですから！」と言わしめるほど……。基本的に丁寧な口調で話す、《煩惱まみれ》《静かにできない》《かつこつけ》の三大欠点があるオチャラけた性格。基本的に美人な女が大好きで《虚圏》についたと知った途端、ネリエルとハリベルを探し出すほど……（その時は見つからなかったが）。しかし、ハリレム願望は本人曰くなくいらしく「日本人に生まれたんだったらやっぱり一人の女性を最後まで愛しぬくことこそが素晴らしい愛だと思いませんか？」が自身の恋愛観。

ヴァストローデ

ネリエルとハリベルの探索をあきらめたのち最上級大虚時代のドルドーニに遭遇。やたら気が合い意気投合したのち、こない人（？）が藍染に良いように扱われるのは許せないと思ひ藍染に対抗するための組織を作り始め、原作知識をフルに使い破面に代わる新たな進化の方向を模索し始めることになる。

解面となりほぼ人間の姿になった後は、たまにドルドーニと一緒に

に人間界に降りてナンパに出かける。しかし、たいていふられるためあまり容姿はよろしくないと自覚している。（それでもナンパはやめないが……）

組織の名前は未定だが、ドルドーニは組織のトップ2に。のちに合流することになったネリエル、ハリベルを三位と四位の置き最後に適当な人物を五位に充てることで『四刃一強』しじんいつきょうと称する。（もちろん西尾維新である）

オリキャラ設定 ぬらりひよんの孫

名前：百足崎むかしてんあきせ 百

原作：ぬらりひよんの孫

設定：本性は滋賀に居を構える大妖怪《大百足》。そのむかし琵琶湖の竜神を苦しめたといわれるこの妖怪だが、一度人間に退治されてしまいしばらく妖力を失ったため人型になって生活をする。その時に色々と人間の世話になった彼は、その恩義を返すため、人にあだなす妖怪をこっそりと撃退することにした。京に上るぬらりひよんと接触したことがあるが、ちょっととした勘違いから本気の殺し合いに発展してしまい仲は険悪……。といわれているが、何故か毎年賀状を送りあう仲。実は仲がいいのではとうわさされるが本人たちは絶対に認めようとしない……。羽衣狐を協力して撃退した。

普段は自分をご神体として祀ってくれている小さなさびれた神社の神主をしている。人の姿の時は長い黒髪を後ろでまとめた二十歳ごろのいたって普通の神主だが、本性を現すと京都タワーに巻きついてしまった体が余ってしまうほどの巨大な百足となる。竜神を弱らせて掠め取った神気を使い不老になっている。

能力：硬甲鎧……百足退治の伝承にある《矢が通じなかった》から

発生した畏れ。人型の時も本性の時も、肌や甲殻は異常なまでの硬度を誇り、物理攻撃は受け付けけない。ただし、伝承では人の唾液によって甲殻が柔らかくなり貫かれた。そのため濡れるのが大嫌い。

前進全霊……

『百足は決して後退しない』ということから発

生した畏れ。一歩歩くごとに畏れの力が上がっていき、人型の時は物理的威力を持った重圧に、本性の時はそのまま体のでかさと甲殻の硬さに変換される。ちなみにわかりやすい例を挙げると、大体二万歩でリクオ世代の羽衣狐と同等の妖力を持つ。

蟲毒……

昔竜神を弱体化させて苦しめた毒。大百足の切り札。

この毒は致死性のものではないが浴びるとどんな存在も弱体化し、体にため込んだ力を常にあたりに垂れ流すようになる。大百足はその垂れ流された力を喰らい自身を強化することができる。毒が体内にある間は、毒された存在は激痛に見舞われるため、悪行をしていたところは拷問にも使っていた。

部下：一応それなりに広い範囲を縄張りに行っているため小さな組織の長をしている。組織形態は《大百足神社管理委員会》。……妖怪としていろいろと間違っている組合だが今のところ不満は出ていない。心霊的お悩み相談などもしているため、神社のお賽銭とその相談の解決料がこの組織の収入方法である。

鉄鼠・鉄の牙をもつネズミの妖怪。ひどく怒りっぽく頑固な爺さん。数千匹近い鼠を操る。操られたネズミの歯はすべて鉄になるた

め、集団で襲い掛かれればかなりの深手を負わせられる。普段はもっぱら情報収集に専念している。

人魚・琵琶湖に隠れ住む美女。 大百足より年寄りだが見た目は二十歳前後。 大百足の酒飲み友達で人型になって神社を訪ねてはよく二人で月見酒をする。 これといった恐れはないが、大百足と同じように神格化されているため賽銭のいくらかを上納金として納める。妖怪というか土地神に近い。

化け蟹：巨大な沢蟹の妖怪。 何故か水を嫌い風を操る。 普段は高校生程度の少年の姿になり大百足の助手をしている。

大蛇・人と子をなしたことがある未亡人……というカテゴリーに位置している、快活とした老婆。 このメンバーの生活の世話を一手に見ており、基本的に一番力を持っている人。 大百足すら知りにかれる。 ババアといったら強烈に怒りだし、蛇の本性に戻って丸呑みにしてくるので言葉遣いには細心の注意が必要。

オリキャラ能力 めだかボックス

世界：めだかボックス

能力：三無オールスルー主義

前は過負荷認定されていたが、安心院が出てきてからは悪平ノットイ等コイル。

ありとあらゆるものがどうでもいい人物に発現する能力。あらゆる事象を素通スルーりさせて自分に影響を及ぼさないようにする。いわゆる透過能力。透明になったりはしないが、物理攻撃は基本的に素通り。アブノーマルやマイナスによる特殊干渉も完全に素通りさせることから、ほかの人からは《受動的絶対防御》などと呼ばれている。

しかし、その効果から他人に干渉することがひどく困難な上に使用者自身がやる気が全くないので、基本的に傍観に徹することになるしかない、作者泣かせの呪われた能力。存在感皆無、やる気皆無、できること皆無、ゆえに三無主義。

考えたはいいいけど自分では絶対に使いこなせそうになかったので、ほかの人に書いてもらうかなと……。

オリキャラ設定 ネギま

名前：未定

世界：ネギま

能力：《皆無》。特殊な才能があるわけでもなく、魔力が高いわけでも気が多いわけでもない普通の中学生男子。ただし、原作では存在感がない3-Aクラスメイトの誰かの幼馴染。

軍事研に所属しており、米軍海兵級の訓練を自分に課していたりするが、日常生活では一切役に立たないねと幼馴染に言われてへこんでいたりする。

そんな幼馴染が、夜の麻帆良防衛戦に巻き込まれて、鬼に追われる身となったのが彼の物語の始まり。命がけて軍事研から、武器を持ち出し鬼に対抗して長馴染みを助けようと無い知恵を絞って奮闘し、学園長に目をつけられる。

イメージ的には《とある術の禁書目録》の三人の主人公の一人…
…浜面仕上。というか性格はあれを完全にコピペしてもいいと作者は思っている。

クロスというにはあまりに限定的すぎたためオリキャラ認定。

この装備は呪われています。外すためには最寄りの教会に行くか、AT に三層

どういうわけだかおれは、真っ白な空間にやってきていた。

俺……西沢勉はとりあえずわけのわからない状況を少しでも理解するためにぱつと見た感じの景色を言葉にしてみる。

真っ白。ああ、真っ白だった。目が痛くなるくらい真っ白な空間だった。清潔感あふれるといえば聞こえがいいのかもしれないが、正直人間にとっては完全に真っ白な空間というのはよくないってどつかの医学書に書いてあったな。なんか、空虚な感じがしてくるんだと。

まあ、そんなことはいまはどうでもいい。問題なのは俺がいきなりわけのわからない空間に連れてこられたということ……。

「いったい……ここはどこなんだ？」

「あれ？そこは『知らない天井だ……』じゃ、ないの？いやまあ天井なんてないんだけどもさ」

俺がそう言っつて上半身を起こした時だった。へらへらとした軽い声が聞こえてきた。

「だれだ！？」

「誰だっって言われても……『神だ！！』としか答えようがないよ少年」

そういつて俺に話しかけてきたのは、なんだか軽い笑みを顔に浮かべた俺と同じ年ぐらいの少年。

その少年は、何をどうやっているのか何も無いはずのこの空間に胡坐をかいて浮いている。……ういている!?

「か、かみって……あの神?」

「そう。あの神様。正確にいうとギリシャ神界のヘルメスっていう神様だよ。泥棒と伝令の神様」

「なんで自己紹介に泥棒を入れたのかはわからないけど。オーケー。大体理解した。で、その神様が俺にいつたい何の用?」

というか、日本人のおれに何でギリシャの神様が声かけてくるんだよ。というツツコミを入れてやりたい衝動に駆られたが、今は自重する。現状おれの状況を説明してくれるのはこの……自称・神様じゃないのだからへそを曲げられるわけにはいかない。

「ふむ……君の心は分かっているよ!!」

「勝手に読むな!?! 読唇術でもできるのかよ!!」

「直違う気がするけど……心を読むなんて神様にとってはデフォルメ機能さ! 転生がしたいんだろ!?!」

「いや、べつに?」

一切そんなこと考えていないんだが?

「またまた！！テンプレ乙とか思っているくせに！！」

異常なほどテンション高い上に人の話聞かないって完全にうざい奴だよな。友達少なさそう……。

「悪かったね」

「なんで悪口だけ正確に読めるんだ！？」

「でもざんね〜ん。君は転生のために呼ばれたではありません。肩を落とせよやる〜ども」

「いったい何がしたいんだあんた！？」

「心が読めるんだろ！？話を聞きたいって最初からいってんジャン！？」

「神は時として……というか基本的に人の話は聞かない」

「含蓄ありそうだけどこの状況で言われるとふつうに腹立つわ！！」

「ナイスツツコミ。元の世界に残って、吉本はいれば芸人になれたと思うよ」

「その世界から切り離された理由の説明を求めてんだよ！！」

「何こいつ！？こんな不条理な神様いるだけで害悪だろ！？」

「まあ、からかうのはこの辺にして……」

「おいこら?」

「ははは! 神様だからアイアンクローなんてきかないよ!! だからその手を離しなさい。僕が泣いちゃうじゃないか!？」

「きいてんじゃねえか!！」

まあ、そんな無駄話がしばらく続き、三十分後。

ようやく神様は落ち着いたのか、忌々しい笑みを浮かべながら（この数十分でこの笑顔がものすごく嫌いになった）、事情を説明してくれた。

いわく。俺は死んだらしい。いわく、日本の神様は死んだおれを即座に新しい命へと転生させようとしたらしい。いわく、基本的にギリシャ神話の神様たちは人間臭い割に神という職業柄娯楽が少ないため、退屈しのぎを欲していたらしい。いわく、でも自分の管轄から魂引き抜くと『最高神ゼウス』あたりがとてつもなくうるさいため、仕方なく日本の神様から俺の魂を買い取り話し相手になってもらうことにしたらしい。

「以上状況説明終了。わかった?」

「どうして俺は死んだんだ?」

「あれ? 覚えてない?」

「ああ。まったく……」

「ふん」

「な、なんだよ？俺そんなに言いにくい死に方だったのか！？」

「いや。99歳で老衰で死亡。最後には家族たちにみとられて幸せな最後を飾ったって日本の神様からは聞いたよ」

「大往生じゃねえか！？その割にはなんか若々しいな俺の精神！？」

「そりゃ、魂の半分は魂の溶鉱炉にぶち込まれていたからね。半分ほど転生はしているだろうよ」

「じゃあ俺が名前をはっきりと覚えているのも、二十代までの記憶が鮮明に残っているのもそれが原因！？」

「まあそう言うことになるだろうね。よかったじゃないか！！万人の憧れである若返りができたんだよ！！」

「死んでなきやもつと素直に喜べたけどな」

「でさあ。話は変わるけど……君今この話が二次創作臭いなあとか思っているでしょ？」

「まあ思っているけど……その割には神様らしくないよなお前？」

「なんだい？君もほかの奴らとおんなじなの？神様に土下座させて優越感に浸りながら『へへへ！！おれって神よりつえーんだぜ！！』そんな俺がチートハーレム―物語を作ることになれが文句を言えようか！！いや、いえない！！というわけで……ヒヤツハ！！神コラ！？おれが望む力を好きだけよこせや！！はあ！？むりい！？ふざけてんじゃねーぞ！！てめえのせいで俺死んだんだぞ！！それ

なりの侘びと覚悟を見せんのが神道ちやうんかい!?』というかんのじの厨二病あふれる、人間のエゴの塊的なせりふを吐きたいのか?」

神様は意外と毒舌でした。というかこの神様、二次創作業界に平然とケンカ売ったぞ!?

「まあ、これから暇つぶしの話し相手になってもらうわけだし……君が望むなら今すぐにでも土下座しながら『マジッスンマセンした!!!』っていつてもいいわけだけど」

「やめてくれ……あんなこと言われた後でそんなことしろっていったらおれ完全にヤクザか厨二病ジャン……」

すくなくともまともな人間の感性ではそんなことできないと思う……。

「つーかお前の土下座ってなんか軽いな……。人間の土下座ほどの重さもない気がするわ」

「神様は基本質量がないからね。軽いのは当たり前え」

「そついう問題!?!」

まあ、そんな感じに俺は神様の話し相手になった。

二次創作について話し合ったり……。

「だからさあ！！あそこほど神様ないがしろにしているところないと思うわけよ！！だって、神様土下座だよ！？足がない神様だっているのにどうやって土下座しろっていうのさ！！」

「そついう問題じゃ……。あと最近はそう言っつて話は減ってきてるつて話じゃないか。それに神様を屈服させるといふシーンによって主人公の特異性＋最強性があらわせるんだからやっぱりあれくらいはしないと……」

「でもさあ……」

ちなみにあとで聞いてみると、この議論は人間界で言うところには二百年に相当するほど長く行われていたらしい。

まあそんなこんなで、おまえずいぶんと長いこと神界いるからそろそろ神になんね？そつちの方が毎年の神様人口表提出するときかなり楽なんだけど？なんてゼウスさんに言われ始め、ヘルメスにも……

「なつちやえよ。泥棒の神様の座席上げるから」

というかヘルメスの場合は完全に厄介払いだ……。いらねえよそんな不名誉な神様の座席。

そんな感じに俺が神界になじみ始めたときだった……。

俺はひとりの人間に恋をしてしまった。

「うわ……」

その子は可憐でかわいく……そして不幸だった。

これほどつらい目にあっている人間がいていいのかと彼女を見たときおれは思った。そんな彼女を助けたいと思ううちに俺は、彼女から目が離せなくなり……そして恋をしてしまった。

何とかして彼女を助けたい。ヘルメスにそう相談してみたが、奴の返事は連れなかった。

「いや。管轄外。あつちのことはあつちの神様がちゃんとやる決まりになってるんだよ。僕たちがしゃしゃり出て行ったら神界同士の戦争になっちゃうじゃないか」

「でも!？」

「勉……わかってくれ。神様だって……できることとできないことがあるんだ」

それはいつもに増して真剣な言葉で、その言葉が事実だと分かって、俺は黙ることしかできなかった。友人だって好きで人間を見捨てているわけじゃない。こいつは意外といい奴だということは長年付き合ってきた俺が知っている。ただ、ギリシャ神話はもはや過去の遺物だ。今の世界は三大宗教たる『仏教』『キリスト教』『イスラム教』がすべてしまっており、ギリシャ神話を信仰している人間は年々減少してきている。そのため神たちの力も減少し、いまや彼らが救える人間なんて指の数程度でしかなかった。

現状最もギリシャ神話が盛んなのは日本だが、あれは信仰ではな

そして、俺は目を覚ます。そこはうつそつと茂る森だった。

「いててて……いったいここはどこなんだ？」

あの子と離れた場所じゃなかったらいいな。そんなことを考えながらおれは自分の体を確認していく。容姿は生来の日本人のまま。ランクで言うなら『中の下』か『下の上』。つまりは限りなくふう。

戦闘能力なんてものは皆無だ。生前はふつ々の学生だったようにだし、神界では数千年近い年月を体を動かすことではなく、ダラダラとだらけながらのヘルメスとの会話にあててしまった。もし生前何らかの特殊能力を持っていたとしても、風化しているか錆びついてしまっているだろう。

頼れるのは口先三寸。ヘルメスと鍛えたよく回る口ぐらいか……。

「いいよ。それでも……必ず助けてみせるから」

『いやいや……むりでしょ？何身の程知らずなことやってんのさ』

そういつて決意を固めたとき、俺は信じられない声を聴いた。

そう、神界にいた悪友。ヘルメスの声だった。

「ヘルメス！？どこにいる！！」

『「」だよ。「」』

俺はヘルメスの声が聞こえるところに目を向けると、そこには！！

「へ？」

羽の付いた兜が乗っかっていた。というかよくよく体を見回してみれば覚えのない奇妙な武装がいつの間にか俺に装備されていた。

兜と同じように羽の生えたサンダル。こしには針のように細い半月上の刃を持った刀。わかりにくかったら、丸い円を描いて、線の部分の三分の一を消してみると大体似たような形になる刃だ。

刀……というか刃が円形になった鎌といった方がいいのかもしれない。ショーテルという昔の武器らしい。

『君だけ送るのは不安だったからね。友人のよしみで僕の武装……つまりは神具を貸し与えてあげるよ。兜の名前はペタソス。僕の象徴的武装だよ。姿を消すことができる。サンダルの名前はタラリア。空を飛び神速の速さで走ることができるよ。その鎌の名前はハルペー。メデューサの首を落とした首切り鎌だよ。切りつけるだけで首が落ちる一撃必殺特典が付いた武装だよ』

「さ、最後の武装以外は感謝する……」

ぶ、物騒すぎる。この鎌だけは絶対に使わないようにしよう……。心に固く誓いながら、俺はヘルメスに笑いかけた。

「その……なんつうか……ありがとな。ヘルメス」

『何を言っているんだい。友達じゃないか？ だったら君の恋愛を応援するのは当然のことさ』

「そうか？……そうだな」

まったく。神様のくせにつくづく人間臭い奴だ。そういうところも気に入っているけど……。

『あと、話し相手がいなくて僕もさびしかったからね。これからは武器に移植した意識体を使って常に君に話しかけることにするよ』

「え？」

『戦闘中だろうが、彼女とようやく結ばれて迎えた初夜だろうが話しかけてあげるからね？ やった！！ これですべて一人でもさびしくないね！……』

「ふざけんな！！ それはただの嫌がらせというんだ！！」

な、なんてこった！？ おれの感謝の気持ちを返せ！！

「くそ！！ こんな防具外してやる！！ 大体なんだこの羽の付いたサングダルと兜は！！ ダサいんだよ！！」

『なんだよ。僕がせっかく好意で貸してやったのに』

「明らかにただの嫌がらせだろ！？いうこと聞かずに人間界に降りたおれへの制裁だろ！？」

しかし、俺がいくら力を入れようともその装備が外れることはなかった。瞬間接着剤どころか、工場で溶接されたみたいだ！！

『ピピっ！！ この装備は呪われています。外すためには最寄りの教会に行くか、AT に三億円を振り込みなさい』

「ザオリク！！」

あまりにむかつ腹が立ったので手にもったハルペーを地面にぶつけてがりがり削ってやるが……。

『ははは！！むだむだ！！武装に宿っているのは僕の意識体であって僕ではないからね。そんなことされても痛くもかゆくもないよ。あとその武装は神界製だからね。そっちの世界で何しようが壊れることは絶対ないよ？』

「ざけんあああああああああ！？」

こうして、俺のにぎやかな、片思いの少女を救う旅が始まるのだ。

この装備は呪われています。外すためには最寄りの教会に行くか、AT に三層
というわけで……書いてみました神具使い!!

行く世界は未定です。ので、ヒロインの少女はぼかしてみました。
彼女のところに当てはめるキャラはあなたの自由!! さあ、書いて
みたくないですか？

ないですか。はい、すみません。

キャラ設定 ネギま

キャラ名《敦賀迷彩》

スキル《千刀流（言わずと知れた刀語のスキル。戦場には無刀でいどみ、敵の武器を盗んで自分の武器として使う）+盗んだアーティファクトの一時使用权（カードやアデアットされた道具を盗み、一回だけ自分の武器のように使うことができる）+盗んだ武器を格納する倉庫（ただし保存はできない。つまり、長いこと放置すると必ず不備や調子が悪いところが出てきて使えなくなる）

来歴《神によって転生させられた転成者。くじ引きによってスキルを決められたが、あまりにマイナーすぎるスキルのため即座に原作介入をあきらめた。だが、転生した先が帝国と連合の激戦区の中央に位置する、避難民が取り残された小さな村という不幸に見舞われてしまう。

村人を助けるため、何よりも自分の命を助けるために千刀流を駆使して戦場にいた兵士たちから武器を奪い、戦闘継続を不可能にしてその戦場を一持休戦に持ち込み村人たちを避難させた。

そこから尾ひれ背びれが付き、戦場を丸く収めて集結させてしまう『戦盗流』なる流派の使い手がいるとまことしやかにささやかれるようになってしまい、コスモエンテレケイア完全なる世界に目をつけられ暗殺者に常に付け狙われるようになってしまった。

性格・見た目《見た目はまんま敦賀迷彩だが一応男。暗殺者を煙に巻き逃げ回ることで、原作のキャラに近づいていく？

灼眼のシャナ 改造クロスキャラクター

名前：ギルガメッシュ (fate/stay night参照)
フレイムヘイズ・王威の示し手 (例外としてもう一つ《宝具の統べ手》という名前もあり)

設定：古代メソポタミアを滅ぼしたのが実は紅世の徒で、その復讐のためにフレイムヘイズとなるという設定。

半神半人の存在といわれるが、実は徒と人間の子供。バビロニア時代は昔はフレイムヘイズもいなかったため好き勝手に来たという設定 (無理あるかな?)。

性格はまんま fateシリーズのギルガメッシュ。自在法もゲイト・オブ・バビロンエヌマエリッシュまんま王の財宝。天地乖離す開闢の星はめったに使わない。

復讐を終えた後はと徒以上に自由気ままに世界を放浪する。

契約した紅世の王の名は《天の財宝》。性格は fetashiriusの誰かを推奨。正直に言うとは決まっていけないのでお任せ。

色々と無理のある設定だとは分かっていますが、思いついてしまったのだから仕方がない!! 面白いと思うので誰か書いてください > m () m <

オリジナル主人公 世界未定

そこは真っ白な世界。

何もない誰もいない、ただただ目を焼くような白がある、そんな世界にいたときの俺はえらく愉快的奴だったらしい。

右手にはアク○リアス。左手には日本酒。

目の前にいるダンブルドアなりに白い髭を蓄えたクソジジイはそんな自殺志願バリに危険な焼酎割りをしている俺を見ながら、苦笑しつつ焼酎を飲んでいた。

『にしてもヌシは欲がないの……………せっかく転生させてやるうえに三つ願いを叶えてやるよといったのに、一つ目は高級焼酎の用意。二つ目はワシと酒盛りがしたいとは……………バカじゃないのか？』

「んだよ。神様と酒が飲めるなんて最高の経験じゃねーか。転生先で自慢できるっつーの。」

『それに最後の願いだが……………固有スキル《ギャグ補正》EXって……………。大丈夫なのか？主にお前の頭が……………』

「神様って意外に辛辣なんだな……………。」

『こんなことを言うておるのはおぬしにだけじゃ。まったく、もっとかっこいい能力を選ばんか！ワシの格が下がるじゃろうが！…！』

「最終的に自分のことしか考えてないだろそれ……。まあ、神様はそういうけどもさ、実際結構チートだと思っぜ俺が貰った能力」

『まあ……。そうじゃがな。不老不死ぐらい願わんかバカモノが！』

老人はそういったあと、最後の酒を飲み干し、ヨッコイショと立ち上がる。

『では、又シを転生する世界へ送り込む。どんな世界に出るかはまったくわからんが、まあ、頑張れ。』

「それこそ愚問だぜ神様。」

俺はそう言いながら不敵に笑った。

「俺はどんな世界でも笑って（・・・）頑張れるようにこの力を貰ったんだ。頑張ることなんて当然だろ？」

俺がそういうと同時に地面に巨大な穴が開き、俺を飲み込んだ。

『まったく。次死んだらまたここにこい、若造。貴様の失敗談を大爆笑しながら聞いてやろう。』

老人の苦笑が、この世界で俺が最後に見た景色だった。

オリジナル主人公 世界未定（後書き）

というわけで、ギャグ補正主人公を投下してみました!!

『シリアス？ バカめ!! 奴は死んだわ!!』

『おふざけはここからや!』

『シリアス？ 何それおいしいの?』

をすでいくキャラです!!

あれ？ 意外と多い？

…
十…
十…
……………
十…
十…

数日後……第四次聖杯戦争を行うために、冬木市を訪れたマスターたちは信じられない光景を目にすることになる。

「えゝ突然ですが……聖杯戦争のルールが、変更になりました！」

突然わけのわからない魔力の塊に拉致されたかと思うと、放り出されたのはなんかやたらと派手なセットを組まれた、冬木市市民体

育館。

その中央ではなんか見たことがあるかわいらしい銀髪の少女が、マイクを片手にそんなことを言っていて……。

「つて!? イリヤ!? なんでこんなところに!?!」

「ちょ、ちょっと待ってアイリ! あの子イリヤにしてはちょっと大きくないか?」

「それもそのはず!! 私はある大人の事情によって、未来から召喚された第五次聖杯戦争に参戦する予定の未来のイリヤなので!」

「大人の事情ってなんだ、イリヤ!?!」

わけのわからないままちょっとだけ大きくなった自分たちの娘に、そんなことを言われ、原作の落ち着いた雰囲気はどこへやら、切嗣とアイリは慌てふためく。

「こ、ここはいつたい?」

そんな二人を完全に無視する形で、黒いスーツを着たセイバーは真っ暗な体育館を見回し状況を確認しようとする。その時!!

「第四次……魔術師大激突! チキチキ・聖杯戦争おおおおおおおお!!」

どどんぱぱぱ!!

何やら間抜けなおとともに、何やらド派手な蛍光色で書かれた字幕があたりを飛び回る！

それと同時に体育館のライトがアップされ、体育館の中があらわになった！

そして、セイバーたちが座っている場所は……

「って！？ クイズせき！？」

そう……切嗣が驚きの声を上げたように、某クイズ番組の回答者席のような席に無理やり座らされていたのだ！

よくよく周りを見回してみれば、

「おい！？ これどうなってんの！？ これが噂の聖杯戦争なの！？」

「わはははは！ なんだ、なかなか愉快的催しのようにだな！」

きよろきよろとあたりを見回し、首をかしげるウェイバーと、爆笑するライダーペア。

「やるからには絶対に勝つぞランサー！！ 必ず私に聖杯を届けるのだ！！」

「もちろんです。我が主」

「頑張つて〜ディルムツド様〜！！」

「あれ!?」

なんか意外と乗り気になっている、アーチボルト夫妻とランサーのトリオ。

「おお、ジャンヌ!! このようなところで我が雄姿を見ていただけるとは何たる幸運!! 見てくださいジャンヌ! 必ずやこのわたくしめが優勝を……」

「ちえ……殺しはダメなのか」

目を血走らせ、鼻息荒くセイバーを見つめるキャスターと、人殺しがある理由によって禁止されてしまった龍之介ペア。

「えっと……一応これに桜の命がかかっているんだけど……」

「AAAAAAAAASAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

何とも言えない表情でそんなことを呟く雁夜と、意味不明な絶叫を上げるバーサーカーコンビ。

「これは……同盟はどうなるのだろうか?」

「あの……マスター。それ以前にこれ本当に聖杯戦争なんでしょうか?」

無表情で顎に手を当て考え込む言峰綺礼と女の格好をしたアサシンペア。

「王たるこの我おれにこのような手間を取らせるなど……雑種風情が!

覚悟はできているか!！」

「こ、根源への到達が……こんなことでッ!？」

言葉とは裏腹に意外と楽しそうに席に座っているアーチャー（ギルガメツシュ）と、なんか悄然とした表情で落ち込む遠坂時臣ペア。

この聖杯戦争に参加するはずのサーヴァントとそのマスターが勢ぞろいしていたりして……。

「い、いったいこれは……」

「何が起こっているの?」

「わからない……だが少し様子見をする必要があるそうだ」

なんかもう開始早々、切嗣が考えていたマスターのご誘導やら、暗殺によるマスターの排除やらがダメになってしまい戸惑いながらもなんとか状況を把握しようとするアインツベルン陣営。

その時、セイバーが何かに気づいたのか、切嗣の肩を激しくたたきある方向を指差した。

「切嗣……あれ!！」

「なんだセイバー!！」

何かヒントになるかもしれない。そう思って切嗣が勢いよくふりむいた先には……。

『あのすいません。カメラもうまわっているんで雑談は控えてもらえますか?』

というカンペを出してきている大学生然とした恰好をしたADがいて……。

「……………」

もう無言のまま三白眼になる切嗣をしり目に、意味不明な事態は次々と信仰していく。

「は〜いみなさんこんばんわ〜! 『クイズやるんだったらやっぱかわいい女の子の司会が一人いるよね〜』な〜んてなめた理由で未からの逆召喚なんて言う神龍もびっくりな奇跡によって参上した、みんなのアイドル、司会のイリヤスフィール・フォン・アインツベルンで〜す」

「今回の聖杯戦争で八人目のサーヴァント『コメディアン』のクラスにて現界した『喜劇王』チャールズ・チャップリンで〜す」

「……………ちよつと待てや!?!?」

常識あるサーヴァントやマスターがイリアの隣に、さも当然といった様子で立っていたちよび髭紳士に入るが、

『第五次の時よりも進行遅いですよ〜。まいてくださ〜い』

なんてふざけたカンペを出すADによって、

「いよいよ始まりました、第四次聖杯戦争!」

完全にスルーされる方向になった!!!

「今回……聖杯はいつたい誰の手に渡るのか!! それがいよいよ今夜決定されるのです! さうて、聖杯を手に入れ願いをかなえるのはいつたいだれか!」

「出演者の紹介は……C の後で!!!」

「チャンネルはそのままだよ」

「……真剣に待ってくれえええええええええええええええええ!!」
「」

カメラ目線で手をひらひら降るチャップリンとイリアに、常識も
私たちは悲痛なツッコミを入れるのだった。

f a t e / z e r o ではなく……カーニバルファンタズムじゃー！！（後書き）

原作はタイトル通り……カーニバルファンタズムです！！

知っている人は知っていると思いますが、知らない人はy o u t u b eでアップされているのを参照してください。

こんな第四次があってもいいよね〜という完全な悪ふざけのもとつくられたこの話。チャップリンは聖杯にふれる権利をなく奪された代わりに、聖杯戦争のルールを少なようにいじれる固有結界を手に入れているという設定。

彼の目的は『万の悲劇を億の笑いに変えること』。それに賛成したマスター《この小説を書いてくれる作者》と協力することによって、カーニバルファンタズムの世界観を第四時に現界させました！

改変されたルールは

- 1・殺し合いではなくチャップリンが出す課題をクリアして勝ち抜くこと（かるた・黒ひげ危機一髪・ツイスターゲーム・風船割りゲーム e t c)
- 2・宝具はチャップリンの許可がない限り使ってはいけない。
- 3・火薬・水銀などの危険物は取り扱ってはいけません
- 4・事故であれ故意であれ……相手を殺害するような行為は厳禁！（ただし、ギャグ補正が働くような行為ならよし！ チャップリンの固有結界では取り込まれたものすべてにギャグ補正がはたらきます！）

といったものです。

ネタは臓硯を樽の中に入れての黒ひげ危機一髪を、雁夜が嬉々として行う程度のものしか思いつかなかったので、ほかの人に丸投げ

することにしました。

気が向いたら書いてください^^^

鷹の目×ネギま!

「おい、詠春! つえーやつしらねえか?」

「どうしたんだナギ? いきなりそんなこと言っ……」

「だってせっかく戦争にきたのに、大した奴いねーんだもん。正直もう退屈で仕方ねえよ」

夕食の準備をしていた詠春は、ため息をついて思考を巡らせる。

「……こつちの世界の強者は知らないが、旧世界にはとんでもないのが一人いたな……」

「旧世界の? おやおやそれは興味深いですねえ……。いったい誰ですか?」

「アルも知っているんじゃないか? その瞳はタカのように鋭く、一睨みただけで相手は戦慄を覚える……」

「ああ……あの……」

「おい何なんだよ!! 二人だけで納得してないで俺にも教えるよ!」

不満げにそう言ってきたナギに苦笑して、詠春はその名前を口にした。

「彼の名前は……」

*

オスティア防衛線。

赤き翼によって一方的に蹂躪される帝国。その上空をふわふわと飛ぶ小舟が一隻。

「あれが赤き翼か……」

巨大な十字架のようなものを背負った男がタカのように鋭い目を細め、戦場を見下ろす。

「……………」

男は無言のまま、十字架のようなものにてをかけ……。

*

「千の………」

ナギが片手に魔力を収束し、岩をもとかす雷を放とうとした。

その時

「なっ！」

ナギの雷が飲み込む筈だった、鬼神兵が真つ二つに切り裂かれた
！！

「いったい、なにが！！」

「詠春か！？」

「違う、おれじゃない……………。だが、あの太刀筋は、まさか！！」

その時、詠春の目が捉えたのは、真つ二つになり地響きを立てて
崩れ落ちる鬼神兵の奥からふわふわと漂う一隻の小舟。

その苛烈な戦場には似つかわしくないその小舟の上には一人の青年
の姿。

その青年を確認した詠春は全身に冷や汗を流した。

詠春の異常な様子を訝しんだナギとアルが詠春のしている方向に意
識を傾けた瞬間、途方もないプレッシャーが辺りを包み込んだ。

「このプレッシャー、身も竦むような眼光、そして身の丈以上の長
大な太刀……………」

「まさか彼が……………」

「旧世界最強の剣士、『鷹の目』ジェラキユール・ミホーク……………」
……………」

*

真紅の炎に包まれるオスティア防衛線。

数多の帝国兵は地に伏し、鬼神兵は真つ二つに切り裂かれたり、

首をはねられたり、どこかしら体の一部を切断され沈黙している。

「あなた……いったい何しに来たんだよ……！」

戦場に立つのは紅き翼と、鷹の目のみ……。

警戒心たつぷりにミホークを睨みつけてくる紅き翼の面々をしり目に、ミホークは『黒刀・夜』を鞘におさめ、一言こつつぶやく。

「暇つぶし……！」

旧世界最強の剣豪。ジェラキユール・ミホーク……魔法世界に参
△ソドウス・マギクス
上……！

「おう！あんなが最近こつちで名を売り出した旧世界最強の剣豪、
ジエラキユール・ミホークか！！」

「……………」

とある宿にて……………。

朝食をとっていたミホークのもとに一人の巨漢の男が現れた。

「俺の名前はジャック・ラカンだ！！俺もこつちじゃ、無敵と滅法
噂の男でな……………」

巨漢の男……………ラカンはそういつてミホークに自分の拳を向けた。

「一手しあってくれねえか？」

「俺と手合わせを……………？」

ミホークはそういって『黒刀・夜』に手をかけながら立ち上がる。

「強さの果てに何を望む……強きものよ」

「ああ？そんなもん決まっているだろう……最強の俺だ！！」

「ふっ……いいだろう。久しく見る 強き者よ。俺も貴様と戦ってみたい」

その言葉と同時に、夜と拳が振るわれ、あたり一帯を吹き飛ばし空をかち割った！！

*

最終決戦…… オスティア墓守の宮殿にて……。

最深部の儀式場には今まで赤き翼としのぎを削ってきた組織の幹部たちと、一人の正体不明の人物が立っている。

そこについたのは紅き翼の面々と、△山下ウス・マキクス魔法世界ですら最強の名を冠し、名実ともに『世界最強の剣豪』を手に入れたミホーク。

「やあ『千の呪文』……そして『鷹の目』。また会ったね。これでいっただい何回目だい？」

敵の幹部の一人であるアーウエルンクスがナギとミホークに話しかける。

「僕たちもこの半年で君達に随分と数を減らされてしまったよ……ここらでけりにしよう」

そういって、一斉に身構える幹部たちを無視してミホークはじつと正体不明の人物へと目を向けている。

「ああ？どうしたミホーク。腹でも下したか？」

「きさまは気づかんのか……」

「？」

「いや……いい」

からかうように尋ねてきたラカンに、ミホークはそういうと、『黒刀・夜』に手をかけ鞘から抜き放つ。

「ああ？珍しいなあんたが一番槍やるなんて……」

少し驚いたように目を見開くラカンに、ミホークは全く表情を動かさずその剣をふるった。

「押し量るだけだ。近く見えるあの男と我々の本当の距離を……」

瞬間、すさまじい威力で振るわれた切っ先からとんでもない速度で斬撃が飛び、オスティアの神殿を両断しながら正体不明の人物へと突き進む！！

しかし、それに気づいた幹部たちは各々の障壁を強化して、ミホークの世界最強の斬撃を防ぎきった！！

「……」

「無粋だね……『鷹の目』この方と戦いたいならまず僕たちを倒していきなよ」

「よかるっ……」

瞬間、ナギたちが幹部に飛びかかるのと同時にミホークは剣を一閃！！氷をまとっていた男を吹き飛ばした！！

「押しとおる……」

「やってみるよ身の程知らずが！！」

最終決戦の火ぶたが切つて落とされた……。

そして……

*

時は流れて……。

「どうしてお前がこんなところに……」

場所は京都。リョウメンスクナが封じられた湖に彼はたっていた。

騎士のようないでたちに背中に背負った十字架のような刀。

周囲には半分石化しかかっている赤毛の少年と、倒れた少年を抱きかかえるツインテールのオッドアイ少女。目の前には氷漬けになった鬼神。そして宙に浮かんでいる知り合いの吸血鬼と知らない口ポット……。

「あの赤毛の小僧……ナギの子供か……」

そして、男の足元には片手を切り飛ばされ、若干弱っている白い少年が倒れている。

「まさか君のがこんなところにいるとはね……。完全に想定外だよ

……。いったいここに何しに来たんだい？」

「……………」

青年はいくつもの年齢を重ね、立派な男へと成長していた。

「……………ただの」

そして、男は鞘から引き抜いた剣を一閃しつまらなさそうに呟いた。

「暇つぶしだ」

瞬間、見えない巨大な刃に切り裂かれたかのようにリョウメンスクナが両断され粉々に砕け散った！！

世界最強の剣士…………『鷹の目』ミホーク。こここの参上！！

鷹の目×ネギま！（後書き）

短編小説のほうで。いや、誰かに書いてほしくて……つい、ね？

zeroにいきたいっていったじゃん……（前書き）

発作的に書いてしまった。

反省も後悔もしている。

zeroにいきたいっていったじゃん……

セイバー編

「その剣を抜けばソナタは人ではなくなる……。本当に構わないのか？ アルトリアよ」

「構わない……。このブリテンが……。守れるなら！！」

岩に刺さった美しい剣の前に、金色の美しい髪を短く見えるようにまとめた美少女と、一人の老人が問答を交わす。

そして、どうやらそれが最後の問答だったらしく老人は黙り込み、美少女は岩に突き刺さった剣の柄をかみそれを引き抜く。

それと同時にあふれ出す、圧倒的な魔力と言い知れない力。

少女はその体に流れ込む膨大な力を感じ、自分が人ではなくなつたのだと本能的に悟つた。

「今日……。この時をもって、汝アルトリアはその名を捨て……。アーサーと名乗るがいい」

杖を持った老人が、剣から流れ出る力をその身に受け、吐息を漏らす少女を見て朗々とした声で告げる。

少女はその言葉を聞きながら自分の手に収まった美しい剣を掲げて、王となる誓いの言葉を紡ぎだす。

砂煙によって少女は思わず悲鳴を上げた。

まだ王になって三秒ほどのアルトリア 改めアーサー王。そんな彼女に原作通りに威厳を求めるのはやや酷というものだったりする。

そして砂煙が収まった後に残ったのは……。

首から地面に埋まった少年と…… 木端微塵になった巨岩だった石ころたちだけだった。

「え、えっと……マーリン。これはどうすればいいのでしょうか？」

「……さすがに死んだじゃろうから、墓ぐらいは作ってやらねばならん」

何でこんな大事な儀式にこんなわけのわからないガキの墓をつくらねばならんのじゃ……。

そんな気持ちがありありと浮かんだが表情で、そんなことを言いながら老人…… 大魔導師マーリンは杖を一振りしあたりに散らばった石を墓石にしようと操りだす。

その時、

「いててて……。あのクソ神が……もらったスキルが無かったら f a t e 入りして10秒でお陀仏だったぞ……」

なんとその少年は、地面に埋まった首を『スポン!!』という間抜けな擬音を響かせながら平然と引き抜いたではないか!?

「え!?!」

「ええええええええええええええええええええええええ!?!」

アーサーは当然のことながら、さすがのマーリンもこれには驚いたのか二人して間抜けな声を上げピシリとかたまる。

しかしそんな二人を一切気にした様子もなく、少年はキョロキョロとあたりを見渡し周りの様子を確認する。

「んあ? なんだここ? 冬木にこんなところあったっけな。第四次聖杯戦争に送ってもらったはずなんだけど……」

少年はそっぴいながらしばらくキョロキョロと、あたりを見回していたがその視線はやがてアーサーの前で止まり、

「……………」

「え、え? な、なんですか? 私の顔に何かついてますか?」

「……………結婚してください!?!」

「はいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!?!」

こうして、アーサー王は神から送られてきたバカみたいな……と
いか真性のバカである転成者によって、正史死から大きく外れた
道を歩むことになる。

それから数年後……。

「アルトリアアルトリアアルトリアアルトリアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「やかましいッ！！ 執務中だマサムネ！！ あと私のことはアアアアと呼べと云っただろウ！！ 仮にもお前はキヤムレット円卓の騎士なのだぞ！！」

「ちょ、それどころじゃないッて！！ 聞けよアルトリア！！ 俺は昨日見てしまった！！ キヤムレット円卓の騎士はみた！！（ばば〜ん）」

聞いたこともない効果音（無論火サス）を携えながらやってきた銀縁眼鏡の少年に閉口しながら、アーサー王は書簡から顔を上げ数年前とは見違えるような立派な騎士になった親友を見つめる。

「で、いったい何を見たんだ？」

「はっ！！ アーサー王。それがですねなんとあのいけ好かないナニスロット君があなたの妻役にあてがわれたギネヴィアとベットでギシギシあんあんやっていたであります！！」

「っちょ、お前いつなっつたろウがああああああ！！」

報告した途端に飛び込んでくるイケメン騎士に銀縁眼鏡の少年マサムネはチツと舌打ちを漏らしとびかかってくるイケメン騎士ランスロットからコミカルな動きで逃げ回った。

「はあ……またギネヴィアですか」

であるべきなのに我慢が全く……」

ガミガミクドクドとアーサー王を説教しだすガウエインに恐れをなした数名の騎士はすごとと執務室から逃げ出す。その際アーサーが『裏切り者！』といわんばかりの視線を飛ばしてくるが、騎士たちは素知らぬ顔で『頑張つてね〜』と視線だけで語り姿を消した。

それに紛れてランスロットも逃げ出そうとするが、

「ランスロット。お前も後でO H A N A S I Iだ。そこで正座して待つてろ」

「そ、そんな!？」

「そんなことよりガウエイン!! 俺的にはさっさとナニスロットの不始末を隠蔽するためにいろんな噂を流すべきだと思っただけど!!」

ランスロットが絶望した表情を浮かべ崩れ落ちたとき、どういう原理か頭をアフロに変形させたマサムネがえっちらおっちら城の壁を上ってきてエクスカリバーによって吹き飛んだ壁からひょっこり顔を出したではないか!!

「ふむ……どんな噂だ? いってみる?」

アーサー王の執務室は実は高さ二十メートルはある塔の上にあつて、とうてい人が上つてこれるような作りではないはずなのだが、ガウエインはもうマサムネの異常さにツッコムことはあきらめたのか嘆息ひとつで終わらせて話を続けるように促す。

「まずナニスロットのナニは馬並みで『性欲を持て余す!!』とか
いってギネヴィア様に襲い掛かったことにして……」

「ふむふむ……」

「フムフムじゃないですよガウエイン卿!? てかナニスロットつ
てなんだコラ!?!」

ギャンギャンわめいてくるランスロットの怒声は『お前のせい
でこうなっているんだぞ?』という殺気だったガウエインの瞳によっ
て封殺された。

「そして、それを聞いたアーサーは『絶望した!!』とかいいなが
らナニを切り落とし女になり、晴れて俺の嫁として……」

「エクスカリバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアア!」

今度は先ほどの威力より1.5倍増しのエクスカリバーによつて
マサムネはジユツとされた。

「陛下……」

「ちゃ、ちゃんとさっき壊したところを通るように調整した!!」

「……ならいいです」

「よくないでしょガウエイン卿!? 今のはさすがにまずくないで
すか!?! シヤレにならない威力でしたよ!?!」

「お前は本当にマサムネ殿の悪影響を受けすぎだなランスロット。この程度でおたおたするなみっともない。あれだ……あの人の神秘のちから……」
『もつとも幸ある未来への導』^{ミカル}「だったか？ あれがある限りアーサー王のツツコミで奴が死ぬことはない。だから問題ない。奴が黒焦げになるうが、投身自殺しようが、爆発に巻き込まれようが、物的人的被害を出さない限り私は小言を言わないと決めた！！」

「ガウエイン卿も人のこと言えないと思います……」

きりつとした顔で仲間を切り捨てると明言したガウエインを見てランスロットは正座したまま何とも言えない表情でそうつぶやいた。

そんな賑やかな仲間たちの様子を見て、アーサーは剣を引き抜いた時から変わらない美しい容貌をほころばせココロと笑う。

ああ、なぜだろうな……マーリン。王になった時は誰よりも正しい道を歩かねばと強迫観念にとらわれていた私だが、今はこんなに楽しい仲間に囲まれてとてもしあわせだ。こんなに賑やかな日々を過ごせてとても幸せだ。

これも全部……認めたくはないがあいつのおかげなのかもな。

アーサー王改めアルトリアはそんなことを考えながら、再び城壁を上ってきたマサムネを見てにやりと笑う。

「さてマサムネ……先ほどの無礼な発言の数々の……弁明を聞こうか？」

「あれ……これ何のフラグ？　ここで選択肢ミスったらまたジユツとされる気がしてならないんだけど」

ひきつった顔に冷や汗を浮かべる親友の姿に、アルトリアは人の悪い笑みを浮かべながら笑うのだった。

征服王の場合

「はあゝあ。なんでこんなところに来ちまったんだる俺は……」

すべてに絶望しきつたような表情でそんなことを呟きながら、城の王の間から城下を見下ろす一人の少年。

彼の目線の先には賑やかに行きかう民草の姿があつて、まあ見えてそれなりに楽しくはある。それが彼の守ったものだといふのならばなおのことだ。

だが、

「俺はこんなところでイスカンドルの悪友やりたいんじゃないやなくて、第四次聖杯戦争に参戦したかったんだよおおおおおおおおおおおお……」

金髪優男な見た目をした少年の魂の絶叫だった。

そんな少年の後姿を部屋の中央に設置された玉座から見下ろしながら真紅のマントを羽織った巨漢の男はからからと笑う。

「未来に起こりうるかもしれない戦いのことを今気にしていつたいたいなんになる！！ その時は我もオオシも死んでいるではないか！！」

「バカ！！ 俺は神様から不老不死特典もらってるから死なないの！！」

「そんな夢物語……いつまで騙っておるきだ？」

「まじだつつつてんだろおおおおおおおがあああああああああああああ！！」

怒声を上げて赤いマントの巨漢の男……イスカンダルに掴み掛らんとする少年を、イスカンダルは片手で彼の額を抑えることで押しとどめ、少年の突撃を無効にした。

イスカンダルの届かないと知ってなお腕をぐるぐるとまわし何とか打撃を与えようとする少年に、王の間の警備として立っていた兵士たちは思わず失笑をもらす。

その姿は神に《ギヤラルホルン神威結いたる大号令》という特殊スキルをもらい、制御できないとはいえラグナロクに参戦した神の力を再現することができる少年の姿とは到底思えなかった。

「ああ、もう。悪かった悪かった。そうだ！ 詫びとってはなんだが今夜新たなおなごたちが征服先から送られてくるのだ！！ どうだ？ 一緒に楽しまんか！！」

「……………」

イスカンドルにそう問われ、少年の抵抗はいったん止まる。

そして……。

「……ヒンニユーっ娘はいるんだろうな？」

「おう！ー！ おぬしの好みに合わせた娘もつれてくるように言っておるー！ー！」

「よっしー！ー！ すごいこう！ 今いこう！ー！ イスカンドル！ー！ 置いてくぞー！ー！」

「まったく……切り替えの早い奴だ」

先ほどまでの怒りはどこへやら。鼻の穴を膨らませた少年がとんでもない速さで王の間を出ていくのを見ながらイスカンドルは腰を玉座から上げ、大いに笑うのだった。

これが……正史になかったイスカンドルの盟友として知られる、神馬をかり神の戦場を降ろしたといわれる《ユウキ・クラシキ》の若き頃の姿である。

英雄王の場合。

「まったく……あの金ぴかは」

ぶちぶち文句を言いながら長い黒髪を揺らした美女が、メタルフレームのメガネを輝かせながら石造りの宮殿の廊下を歩く。

時代は大体古代シユメール朝のウルク。

とはいえあの金ぴかが活躍した時代のちょっと前の時代である。

この美女もどうやら転成を果たしたはいいものの神様によって変なところに送られてしまった口のようだ。

とはいえ美女は文句ひとつ言うことはなかった。

なぜなら、

「金ピカアああああああああああああああああああ!!」

「ゲツ!! ツバキ!!」

彼女は一番会いたかった原作キャラに会えていたからである。

金色の髪に赤い瞳。やたらと金に恵まれてそんな雰囲気を持つ、この国の王の息子……

齢10歳のギルガメツシュである。

いわゆる子ギルというやつだ。とはいえこっちはガチで子供だが。

ツバキと呼ばれたこの美女は何の因果か現代知識を《賢者の知識》と今代の王に勘違いされ彼の息子の教育係を申し付かってしまったのだ。王朝の名前を聞いてなんとなく嫌な予感はしていたが、その息子がギルガメツシュだと知った時の彼女の絶望っぷりときたらもう……。

会いたかったのは暴君キャラのギルガメッシュでガキのギルガメッシュなんて微塵も興味がなかったツバキ。これではあの暴君キャラをいじれないじゃないか!?

なんて命がいくつあっても足りなさそうな理由でギルガメッシュに会いたかったツバキ。

しかし、彼女は前向きな女性だった。

そうだ……今から洗脳……ゲフンゲフン!! 教育を施せばあの暴君キャラではなく違うギルガメッシュが見られるのでは!?

その結論に至った彼女の行動は迅速だった。

子ギルを市中へと引きずりだし民と触れ合わせ、王たる者何物にも慈しみを持たなければならぬと教え、

子ギルにスパルタ方式で近代帝王学を叩き込む!!

当然子供のころのギルガメッシュにそんなスパルタ方式が耐えられるわけなく……。

「こつちへ来るなああああああああああ雑種風情が!! お前の勉強もういやだあああああああ!!」

「黙れこのキンピカアアアアアアアアア!! 私あこのむちの洗脳教育から逃げるとは何事カアアアアアアアア!!」

ギルは逃げた。そうれはもう逃げ回った。そんな逃げ腰の割に原作の面影が見え始めているから始末に負えない。

私は本当にこいつを立派な王にすることができるとだろうか？

必死の抵抗のつもりなのか、宝物庫からパクってきたと思われる名剣名槍を分なげてくるギルガメッシュの攻撃を、原作ギルをからかつても死なないように神様からもらった格が違A・Tフィールドう聖域を使って防ぎ切りながら、ツバキ・ヒビノは大きいため息をつくのだった。

数年後……

「黙らんか雑種風情が！！ この俺に意見するなど数億年早いわ！！
！ ああ、もちろんツバキは別だぞ！！ お前はわが最愛の友であり、最愛の人だからな！！ とうかが結婚してくれ！！」

そんな風に成長したギルを見つめながらツバキは一言、

「……………どこで分岐間違えたんだろ？」

ANSWER：最初からどこか間違っていたことに気づきましょう。

zeroにいききたいっていったじゃん……（後書き）

というわけでzeroのサーヴァントの生前の時代に転生してしまつ織キヤラの話を書きたかつたのですが……なんかいろいろとキヤラずれがパないことになりました。

これはもう書いていただかなくて結構です。作者の趣味ですので。

あ！ ジャンヌダルクと旦那を忘れてた！？ ……まあいいや。

スキル説明：

マサムネ：《コミカルもつとも幸ある一未来への導（ルール）》。

小難し言い回しをされていますが……ぶっちゃけるとギャグ補正です！！

裏切りやら、故国の滅亡やら色々な暗い過去を持つセイバーをいやしてやれるスキルはないかと、マサムネが必死になって頭をひねって考えたベストなスキル。

ノリと勢いとタイミングでたいていのことは何とかなってしまつチート仕様。ただし能力者は常に笑みを絶やさないうようにしないと能力は二度と発動しないというデメリット付きだったりする。

これでシリアス風味にブリテンを攻めてきた外国軍をなえさせたり、ランスロットの浮気を軽いジョーク風にしてみたり、裏切る予定だった円卓の騎士たちをへこませたりしてアーサーが不幸になりそうな事象を未然に防いでいた。

ユウキ：

キャラクターホルン
《神威結いたる大号令》

形状は角笛。それを吹くことにより一時的にラグナロクの景色を再現し、ラグナロクに参戦していた神々を地上の降ろす。

ただし人間のみでそんなものが制御できるわけもなく、神々は好き勝手暴れてその場にいる存在（召喚された神も含む）を無差別に攻撃するので使った瞬間に人生終了のお知らせ。

主人公は不老不死特典をもらっている所以对軍宝具として遠慮なく使った。

そのため単騎での大軍戦が最も得意な臣下としてイスカンドルに重宝されるが、本人いわく『お前の部下になつた覚えはない!!』と、イスカンドルが死ぬまで言い張った。

『男のツンデレとか誰得?』とツッコミを入れさせるためだけに作ったキャラクター。

ツバキ：

《格が違う聖域（A・Tフィールド）》
スバルタ・ティーチャー
《洗脳教育》

前者は神からもらったスキル……いわずと知れた絶対防御。

ギルガメッシュがどのような宝具を使おうと決して抜くことはで

きない最強の盾。(設定としては同じA・Tフィールドをまとった存在の直接攻撃でもない限り破れることはないとしている。当然 fateの世界にA・Tフィールドがあるわけなのでまさに完全無欠の防御を誇る)。

もとは第四次のギルガメッシュをからかっても殺されないように神に頼んだ能力だったが、結局は反抗期に入ったギルの攻撃を防ぐためにしか使われなかった。まあ、神話の敵と戦う時は盾として存分に働いたらしいが……。

後者の能力は《世界最古の家庭教師》などと呼ばれるところからついてしまった。固有結界。心象風景として彼女の転生前の大学の講義室が現れ強制的に敵にスパルタ教育を受けさせ知恵熱を出させるといふ地味なもの。ちなみに知恵熱が収まった後は《戦いなんて不毛だ……》なんて悟った感じの洗脳された人ができてしまう……かどろくかは彼女のさじ加減次第。

ギルガメッシュの家庭教師として活躍したが結局は洗脳は失敗。原作通りのギルガメッシュになってしまう。……が、どういっわけかギルガメッシュに惚れられてしまったようで、やたらと熱烈な求婚を受け閉口している。

ちなみにギルガメッシュはツバキだけは雑種とは呼ばず、求婚の方法もセイバーにした暴君的なものではなく紳士的なものだった。

この恋の行方は「ほら、小学生が担任の女の先生に惚れてしまうあれですよ。そのうち熱も冷めるでしょう……」とあって、ツバキはギルガメッシュが死ぬまで完全無視を決め込んだため悲恋となつて終わったそう……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1049r/>

IdeaNote

2011年12月16日00時48分発行